

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02603

研究課題名(和文) 優生学の歴史と新優生学の展開：医療・教育・福祉における言説と実践の比較分析

研究課題名(英文) History of eugenics and future of Neo-eugenics: comparative analysis of discourses and practice in medicine, education and social welfare

研究代表者

北垣 徹 (Kitagaki, Toru)

西南学院大学・文学部・教授

研究者番号：50283669

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、日本、韓国等の国々について、優生学にもとづく思想や政策の比較研究を、主に歴史的な視点から行ったものである。同時に、最新の遺伝学やゲノム科学の成果を踏まえた、現在進行中の新優生学とも呼ぶべき事態を考慮しつつ、新型出生前診断などのテーマについて、公開シンポジウムなどのかたちを通じて市民への啓蒙活動もおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

優生学にもとづく思想や政策は、歴史的にみれば先進国においてほぼ同時期(19世紀末から20世紀初頭)にかけて生じており、その背景には、当時の高度化する産業のなかで新たに必要とされるようになった労働をめぐる価値観の変遷が存在することが本研究によって示された。優生学が前提とする生命観は何ら普遍的なものではなく、特定の歴史状況のもとで生じた経済的・政治的状況によるものであることを示すことにより、今日にも続く優生学的な発想を相対的に捉え、その限界を見極めることが可能になるだろう。

研究成果の概要(英文)：Principally based on the historical perspective, this project made a comparative research on eugenic thoughts and policy, focusing on European countries, the United States, Japan, South Korea, etc. Besides, through open conferences, it promoted enlightenment activities on themes such as the new type of prenatal diagnosis, taking into account the on-going trend of what is so-called "Neo-eugenics", inspired from the latest research of genetics and genome science.

研究分野：知識社会学

キーワード：優生学 優生思想 社会衛生学

1. 研究開始当初の背景

先端医療の世界では、遺伝子操作によってiPS細胞を作成し、再生医療に利用するのみならず、iPS細胞を利用して遺伝子を改変する技術も実用化されつつある。網羅的出生前診断とゲノム編集技術を得た今日の人類社会は、「新優生学」の時代をも超えて、一挙にヒト遺伝子プールからの「障害遺伝子」の排除と、治療を越えた遺伝子エンハンスメントの道へと踏み入れる、いわば「ゲノムデザイン優生学」時代の入り口に立っているとみえる。こうした現況のなか、ヒトの生命あるいは遺伝子をめぐる人為的な選択・改変といった問題にたいして、市民がどのように対処し、社会的合意形成をはかるのかは、以前にも増して喫緊に考えるべき課題となっている。本研究の研究代表者・研究分担者らは、生命倫理の諸問題に共同研究のかたちで長年取り組んできており、専門家のあいだだけでなく、市民向けのシンポジウムや公開講座を行い、公共の場でも議論を重ねてきた。研究成果としては、『生命の倫理：その規範を動かすもの』（九州大学出版会、2004）を出発点として、すでに4冊の研究成果物の刊行を果たしてきた。こうした研究の過程のなかで本研究の研究代表者・研究分担者らは、優生学の名のもとに形成された言説や実践がもつ社会的な拡がりや、その影響力の深さに気づくようになった。それゆえ、生命倫理の諸問題のなかでも、次第に優生学に焦点を当てて研究するようになり、他方で、その批判としての障害学に関心を抱きつつ研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究は、優生学が言説として形成され、実践として展開されていく過程を、戦前の2期・戦後の3期に分け、医療社会学・社会史の観点から分析するものである。まず、優生学がもたらした政治的・経済的・社会的な価値観を比較検討するために、日本の朝鮮にたいする植民地統治政策、アメリカ合衆国とその移民政策、ナチスドイツの人種政策などを主な分析対象とする。そして、それぞれの国家や各エスニシティ・人種を超えて影響を及ぼし合う横断的優生政策と共に、各国で優生思想の普及に携わった種々の社会階層にも眼を向けつつ、優生学の担った意味や機能の解明に努める。さらに戦後に関しては、米ソおよび日本における新たな優生思想の潮流を再検討しつつ、他方で先進国において進展する生殖細胞の遺伝子治療や新型出生前診断の動向に注視し、公共の場における議論の土台を提供できるよう試みる。

3. 研究の方法

多様な側面をもつ優生学を、国際的な交流や相互作用の見地から検討していくために、研究代表者・研究分担者・研究協力者は個別の領域を探求しつつ、定例の研究会における研究者間の緊密な連携を保ちながら研究を遂行していく。また、これらの研究者に加え、拡大研究会やシンポジウムにおいては、外部の研究機関から各分野の専門家を招聘し、議論の幅を広げていく。個々の研究代表者・研究分担者等は、国内外で資料収集・文献調査を行い、それぞれが担当する地域や時代の事例を検討・分析していくと同時に、この過程で収集しえた資料や調査で得られた知見を共有するために、学内に設置された「生命倫理研究センター」を管理運営し、研究成果の蓄積と公表の活性化をはかる。

4 . 研究成果

三年間の研究を行う中で、研究代表者・研究分担者・研究協力者は定期的に集まって研究会を行い、研究成果を共有しつつ、その深化をはかってきた。同時にそこに随時、外部から研究者を招聘することで、それまでにはなかった新たな知見を獲得しつつ、視野を広げてきた。その結果、優生学思想とそれに基づく優生政策については、時代や地域によって多様な側面があることが認識されると同時に、そこに共通して潜む経済的な価値観や労働観を垣間見ることができた。優生保護法下で行われた強制不妊手術をめぐる訴訟など、研究機関の同時期に生じた社会問題にも目を向けつつ、市民との対話をはかる公開シンポジウムを併せて行った。以下、研究代表者・研究分担者それぞれについて、研究成果の概要を記す。

研究代表者の北垣徹は、2017年5月に西南学院大学にて研究会議を開催した際、「労働する生——優生学の政治的無意識」と題する報告を行いつつ、以下の点を示した。すなわち優生学とは、ある時代に産み出された、ある特定の政治的・経済的状況に対応する知や実践であり、そうした状況を理解することなしには、優生学の本質を把握することは不可能である。優生学が目指す「よき生」とは、たんに生物学的に価値付けられた生ではなく、たんなる寿命や、生体の大きさ・強さなどで計られるものではない。優生学が選択しようとする生、排除しようとする生は、政治的・経済的観点から価値付けられたものである。優生学を生み出した政治的・経済的状況を理解するには、世界的に優生学が制度化される時代、つまり研究所や実験室が設置され、国内的・国際的学会が組織され、優生学的政策が準備される時代を思い起こす必要がある——以上の点である。続いて北垣は、2018年3月にフランス・パリのシアンス・ポで開催されたコロック「ヨーロッパ公共空間における習俗の概念：18、19世紀」に参加し、そこで「モラル・トリートメントと革命期の習俗」と題して、フィリップ・ピネルの精神医学的实践を取り上げた発表を行った。このように、研究全体の統括や研究会・シンポジウム開催を行うと共に、研究の対象を精神医学と優生学の関連に限定して研究を進めた。2018年11月10日・11日には、第22回日本精神医学史学会を大会長として西南学院大学で開催し、そこでもフランスからエマニュエル・ドゥリルらの研究者を招聘しつつ、関連コロックを組織した。また自身も大会長講演「動物磁気論から催眠論へ」を行い、この講演をもとに翌2019年6月に『精神医学史研究』に論文を発表した。

研究分担者の山根明弘は、福岡県糟屋郡新宮町相島に生息しているノラネコ(*Felis silvestris catus*)を対象として、遺伝子解析やGPS追跡等の最新の技術を用いることにより、ノラネコの社会システムの再検討を行った。ネコ科動物の社会の繁殖システムは乱婚制であり、子育てにおいては、オスは基本的に自分の子供の世話を一切おこなわないとされている。調査地である相島には、現在数百匹のノラネコが生息しており、個体識別ののちにネコの行動の追跡を行った。ノラネコの社会ではこれまでに、若いオスによる子殺しが報告されており、島においても出産期には頻繁に子殺しが記録された。3年間にわたるフィールドワークの間に、オスが子猫のいる納屋等のまわりに頻繁にマーキング行動を行い、その場所から何日間も離れない事例が2件(2匹の別のオスによる)記録された。遺伝子解析の結果、上記のような行動をとったオスと子猫の間には親子関係が確認され、自分の子供を子殺しから守るための行動であると結論された。オスが子育てに一切関与しないと考えられてきたノラネコの社会において、オスによる子殺し防止の間接的な関与が明らかになった初めての事例であり、同時にネコ科動物全体の子育ての進化について、再検討の必要性が示された研究である。

研究分担者の中馬充子は、1910年代以降の総力戦・総動員体制下における「人的資源」の国家管理が優生学と結びつき、国民優生法成立へと至る第2期から、1948年以降の、優生保護法が制定され、中絶の合法化とともに日本の優生政策が実質的に実施されるようになる第3期を研究対象とした。まず、「優生思想を支えた戦後の保健科教育」(公開シンポジウム「優生保護法下で何が行われたのか」2018年3月26日報告分)では、戦後の保健教育における優生学思想とその撤収について、今なお、より優れた民族的素質を伝えていく国民優生の立場があり、優生結婚を求め、家計調査を要求する国家政策の意図が根深く残っていることを指摘した。次に、「優生思想を支えた国民体力向上政策」(研究報告会2019年9月19日)では、厚生省組織の体力局・衛生局・予防局・社会局・労働局の5局の動向と実態解明を行った。とりわけ福祉国家実現のため、経済活動が「体力、知力および精神力の優秀な人間」によって担われるべきであり、若壮年層の死亡率低下を図ると共に「欠陥者の比率を減らし、優秀者の比率を増す」事に資する政策が望ましいとする厚生省の主張を軸に真相解明を行った。想定以上の史料蒐集と研究目的はほぼ達成できたと言えよう。

研究分担者の川上具美は、アメリカにおける障害をもった児童・生徒への教育支援と排除という枠組みから、研究を行った。初年度は、主に割り当てられた科研費を西南学院大学内におけるシンポジウム「旧優生保護法下で何が行われたのか」の開催に当て、情報収集と研究会における生命倫理に関する問題意識の共有を図った。また、イリノイ州シカゴ市内で教員をしているサラ・チェンバース氏に連絡を取り、現地調査前の情報収集を行った。これをもとに2年目においては、教育の市場化によって障害を持つ子供への教育にどのような影響を与えているのかを明らかにするために渡米し調査を行った。アメリカのイリノイ州シカゴ市では、公立学校の廃止が進み、チャータースクールが次々に開校しており、これに伴って軽度発達障害をもった児童や生徒が教育機関から疎外されていることが現地調査の結果、明らかになった。これら調査結果をまとめ、3年目には大分大学において開催された九州教育学会において発表し大きな反響を得た。

研究分担者の田中友佳子は、韓国に関する研究では、まず植民地期において日本「内地」から植民地朝鮮へと優生学・優生思想がいかに流入したかを、朝鮮優生協会に焦点を当て明らかにすることを課題とした。永井潜の影響を受けて李甲秀が朝鮮優生協会を設立したことなどを加筆して博士論文の刊行を行うとともに、韓国社会福祉歴史学会で発表を行った。次に、家族計画事業で配布されたパンフレットや大韓家族計画協会の機関誌『家庭の友』などを用いて、1970年代家族計画事業の展開期の啓蒙内容を考察することを課題とした。家族計画はセマウル運動の一つであり、「究極的には各家庭の幸福」を成し遂げ、個人や夫婦、家族の利益、生活の豊かさや文化向上を実現するものとして進められていた。1970年代には「人口の量的調節とともに質的改善のための諸般の政策を総合的に推進されなければならない」と当時の大韓家族計画協会会長は述べているが、今回調査した資料においては「優生」「遺伝」という言葉は見当たらなかった。「質的改善」とは何を言うのか、具体的な解明について今後の課題としたい。

また研究協力者として河島幸夫に、「キリスト教と優生学の関わり」という主題について、主としてドイツと日本の社会福祉の歩みを中心として研究することを依頼した。河島はまずドイツについては、プロテスタントの福祉施設ベートルとの比較を念頭にカトリックの福祉施設フランツ・サーレス・ハウスとミュンスター大学司教区史研究室、ポンの現代史研究所、上智大学図書館で文献資料調査、研究者交流を行なった。彼の研究成果の一端は、二つの講演「ナチス安楽死計画とキリスト教会」および「戦争前夜 ナチズムとキリスト教」と題して大分および熊本での九州地区キリスト教会研究集会で発表された。特にナチス安楽死政策下でのフランツ・サーレス・ハウスの実態は、従来日本で紹介されてきたよりもはるかに複雑な入所者の実態、聖職

者・医師・職員の順応と抵抗を含んでいたことを現地での資料調査と研究者交流によって確認された。次に日本のキリスト教と優生学については、河島幸夫はカトリックの神山復生病院長・岩下壮一神父との比較を念頭にプロテスタントの教会指導者で社会運動家の賀川豊彦牧師の思想と活動を追究した。特に東京と神戸の賀川豊彦資料館、東村山市の国立ハンセン病資料館を中心に文献資料調査を行ない、研究成果の一端を論文「賀川豊彦の優生思想と《弱者の権利》論」として研究雑誌『雲の柱』に発表した。先行研究では優生思想に基づく賀川の差別意識の側面のみが強調されてきたが、河島の研究によって賀川豊彦には「弱者の権利」と題する反優生思想的な論文もあることが発見され、賀川の実践活動全体の中で後世に対する建設的影響をも含めて総合的・複眼的に考察し評価する必要性が確認された。

同じく研究協力者として藤井陽一には、ソヴィエト連邦およびロシアにおける優生学思想や優生政策についての研究を依頼した。藤井は2017年度に、先ず前年に科学アカデミー哲学研究所（於モスクワ）で開催されたフロロフ記念定期研究報告会（国際学会）で行った報告（露語）を基に論文「全人類の価値体系におけるグローバル生命倫理」（露語）を執筆し、拙稿を報告会開催者が編集者を務める論集に寄稿し、掲載された。11月にはモスクワに出張し、前述の報告会で報告「知識社会学の観点からの生命倫理学とマルクス主義ヒューマニズム」（露語）を行った。2018年度には、先ず前年に行った研究報告を基に論文「ソ連における「新しい人間」概念と優生学に関する批判的考察」（露語）を執筆し、前年同様開催者が編集する論集に投稿し、掲載された。11月にはモスクワとサンクト・ペテルブルグに出張し、同じ報告会にて報告「人類の未来における超人と魂」（露語）を行った。藤井は2019年度には、前年同様、研究報告を基に執筆した論文（露語）を投稿し、掲載された。11月にモスクワに出張し、同報告会にて報告「未来における社会的諸関係の総体としての人間の本質」（露語）を行った。

同じく研究協力者として山崎喜代子には、生物学・遺伝学と優生学との関わりについての研究を依頼した。山崎は主に、遺伝学者駒井卓の戦前、戦後を通じた優生学への関わりについての研究を行った。日本遺伝学会、人類遺伝学会の創設者の一人である駒井卓は、日本優生学研究では、優生学者として理解されている。山崎の研究は、駒井の遺伝子観と優生学への関与を明らかにすることを目的とした。駒井の書齋は今も残されているが、戦前の文献は一部の書籍を除いて完全に消失しており、戦後に関しても極めて限定的な文献が残っているに過ぎないことが明らかになり、結果としては、既刊の文献類からの調査研究に限定された。本研究を通して、これまで注目されてこなかった駒井の優生学批判の文献資料を収集できた。その批判の根拠は、現行優生学は、エセ科学であり、優生学を政策化するには遺伝学はあまりに未熟であることに尽きている。戦前は、1940年京大での優生法批判講演「日本人の遺傳と優生の問題」、同年「遺傳學上より見たる民族優生」等、戦後優生保護法成立の際の雑誌『遺傳』での激しい反対意見表明を収集することができた。しかし、同時に、駒井は逆淘汰論を支持し続け、優生学者としての汚名を受けることになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山根明弘	4. 巻 517
2. 論文標題 どうしてどうして? 「ねこは、どうしてひなたぼっこをするんですか」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本の学童保育	6. 最初と最後の頁 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤井陽一	4. 巻 0
2. 論文標題 " " (ソ連における「新しい人間」概念と優生学に関する批判的考察)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 : としての不確定性) (人間の世界: 挑戦	6. 最初と最後の頁 486-497
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 河島幸夫	4. 巻 33号
2. 論文標題 賀川豊彦の優生思想と「弱者の権利」論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 雲の柱 (賀川豊彦記念松沢資料館)	6. 最初と最後の頁 87 - 104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Boug Ahmed, Islam M. Zafar-ul, Iwamoto Toshitaka, Mori Akio, Yamane Akihiro, Schreier Amy L.	4. 巻 9(10)
2. 論文標題 The relationship between artificial food supply and natural food selection in two troops of commensal Hamadryas Baboons <i>Papio hamadryas</i> (Mammalia: Primates: Cercopithecidae) in Saudi Arabia	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Threatened Taxa	6. 最初と最後の頁 10741 ~ 10756
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11609/jott.3348.9.10.10741-10756	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 山根明弘	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 小学校児童を対象としたDNA抽出実験	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西南学院大学 人間科学論集	6. 最初と最後の頁 69-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩野正明・松村敬治・山根明弘	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 新学習指導要領(平成29年告示)における小学校理科教育の指導法 - 「エネルギー領域」と「生命領域」の学習を中心として -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西南学院大学人間科学部 児童教育学科教育研究論集	6. 最初と最後の頁 67-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根明弘	4. 巻 4
2. 論文標題 小野勇一先生の思い出	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 森下財団紀要	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤井陽一	4. 巻 1
2. 論文標題 (全人類的価値体系におけるグローバル生命倫理)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 実) : (人間研究所: その理念と現	6. 最初と最後の頁 327-335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 北垣徹
2. 発表標題 医療の視覚と空間：思想史の文脈で考える
3. 学会等名 第91回日本社会学会 シンポジウム「イノベーションと医療」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北垣徹
2. 発表標題 動物磁気論から催眠論へ
3. 学会等名 第22回日本精神医学史学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和久 大介、関口 猛、Shukor Md-Nor、Badrul Munir Md-Zain、Pazil Abdul-Patah、佐々木 浩、山根明弘
2. 発表標題 マレーシア・ペラ州の水田地帯におけるアジアコツメカワウソとピロードカワウソの生態及び種間関係（予報）
3. 学会等名 日本哺乳類学会第62回大会（於：信州大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井陽一
2. 発表標題 ソヴィエト「体制内異論派」による全人類的価値優位論
3. 学会等名 ロシア・東欧学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井陽一
2. 発表標題 (人類の未来における超人と魂)
3. 学会等名 (フロロフ記念定期的研究報告会)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中馬充子
2. 発表標題 優生思想を支えた戦後の保健科教育
3. 学会等名 西南学院大学公開シンポジウム「優生保護法下で何が行なわれたのか」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川上具美
2. 発表標題 20世紀初頭アメリカの優生思想に関する先行研究レビュー 中村満紀男・米田宏樹著「1920年代における社会適応のための断種と移民制限運動」『優生学と障害者』明石書店, 2004年
3. 学会等名 優生思想と子ども研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川上具美
2. 発表標題 草野舞報告「イギリス児童法と優生思想」について
3. 学会等名 優生思想と子ども研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中友佳子
2. 発表標題 韓国語文献翻訳の進捗状況と内容紹介 シン・ヨンジョン「植民地朝鮮における優生運動の展開と性格：1930年代「優生」を中心に」『医史学』大韓医史学会、第16巻第2号、2006年
3. 学会等名 優生思想と子ども研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中友佳子
2. 発表標題 金美連報告「韓国の教育福祉政策」に対する応答「教育福祉の専門職化の過程 日韓の比較を通じて」
3. 学会等名 優生思想と子ども研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井陽一
2. 発表標題 識社会学の観点からの生命倫理学とマルクス主義ヒューマニズム (知
3. 学会等名 (フロロフ記念定期的研究報告会) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河島幸夫
2. 発表標題 ナチス安楽死政策とキリスト教会 - 障がい者施設を受難と抵抗
3. 学会等名 日本キリスト教団大分地区社会部学習会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河島幸夫
2. 発表標題 戦争前夜 - ナチズムとキリスト教 (第二次世界大戦前夜のドイツにおける政治とキリスト教の関係)
3. 学会等名 日本キリスト教団熊本地区社会部学習会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北垣徹
2. 発表標題 Le traitement moral et les moeurs revolutionnaires
3. 学会等名 Le concept de moeurs dans l'espace public europeen, SciencesPo CEVIPOF (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北垣徹
2. 発表標題 『社会喪失の時代』を読む：プレカリティとはどんな状態か
3. 学会等名 九州EU研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北垣徹
2. 発表標題 モラル・トリートメントとは何か：『狂気の歴史』から考える
3. 学会等名 フーコー研究・京都大学人文科学研究所
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 田中友佳子分担執筆 / 土屋敦・野々村淑子編著 / 乙須翼・大森万理子・草野舞・足達咲希著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 38頁 / 376頁
3. 書名 『孤児と救済のエポック 十六～二〇世紀にみる子ども・家族規範の多層性』 : 分担執筆「第6章 植民地朝鮮における私設孤児院の「隘路」 嶺南共済会(慶北救済会)の設立運営に焦点を当てて」	

1. 著者名 田中友佳子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 360頁
3. 書名 植民地朝鮮の児童保護史 植民地政策の展開と子育ての変容	

1. 著者名 山根明弘、桐野作人、稲垣真一、藤井由紀子、則武広和、時田昌瑞、大石 孝雄	4. 発行年 2018年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 96
3. 書名 NHK 趣味どきっ! 不思議な猫世界	

1. 著者名 鈴木美紀, 山根明弘, 常安有希, 山本葉子, 芳澤ルミ子, 瀬戸内みなみ, 池迫美香, 中島祥子, 前田理子, 北辺武朝	4. 発行年 2017年
2. 出版社 自由国民社	5. 総ページ数 159
3. 書名 現代にゃん語の基礎知識2018	

1. 著者名 中馬充子分担執筆 / 山崎喜代子・古野愛子編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 167
3. 書名 『保育学習ガイドブック - 理論と実践をつなぐ12の扉』 : 分担執筆「第2章 子どもと家族を支える福祉政策を理解しよう」(1. 日本における児童福祉法制のあゆみ 2. 保育・社会的養護の現状 3. 少子化対策と子育て環境の整備へ)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山根 明弘 (Yamane Akihiro) (10359474)	西南学院大学・人間科学部・准教授 (37105)	
研究分担者	中馬 充子 (Mitsuko Chuma) (40261078)	西南学院大学・人間科学部・教授 (37105)	
研究分担者	川上 具美 (Tomomi Kawakami) (50631272)	西南学院大学・人間科学部・准教授 (37105)	
研究分担者	田中 友佳子(田中友佳子) (Yukako Tanaka) (70707174)	九州大学・人間環境学研究院・学術協力研究員 (17102)	
研究分担者	K . J S c h a f f n e r (Schaffner Karen) (80195619)	西南学院大学・国際文化学部・教授 (37105)	